

文具エッセイ2020

- 11.五百円のシャープペンシル■
- 12.アナログなツール■
- 13.文房具と友達関係■
- 14.文房具の立ち位置■
- 15. 文具の持ち歩き■
- 16.機能性と独創性■

11. 五百円のシャープペンシル

文具とは何だろう。決して衣食住を確保するために、命をつなぐために必要な生活必需品というわけではない。むしろ学業やオフィスワークを行う際など、社会生活を行ううえで必ず必要となるものだ。

そう、いわば文具とは、生存本能に起因する原始的な行動から離れ、知的、文化的な豊かさを育もうとする人間性を象徴する道具と呼べるのではないだろうか。

ところで、先日私はある新鮮な経験をした。商店街の中にある文房具店でシャープペンシルを購入したのである。どこが新鮮なのだと首を捻る読者の方もいらっしゃるであろうが、私は普段シャープペンシルに限らず、ボールペン、のり、ハサミ、ノートなど文具全般において、百円均一ショップで購入することが多いのだ。安い値段で売っているのだから最低価格で買う。文具は単に使うことさえできれば何でもいい。今回百均ではなく文房具屋を訪れたのも単なる気まぐれであったのだ。

さていざ文房具屋に足を踏み入れると驚いた。私が普段購入しているシャープペンシルの五倍、十倍、二十倍もの値の張る物がわんさかと置いてあるのだ。正直見た目だけでは大きな違いがあるようには見えない。完全に私の知らない世界である。

結局普段百円でシャープペンシルを購入している私はその時あまりお金の持ち合わせがなかったため、五百円のシャープペンシルを購入した。それでも普段の五倍の値段を支払ったのである。新鮮な心持であった。

五百円のシャープペンシルは百円のシャープペンシルよりもずっと書き味がよかった。適度な重みがあり、更に太さもちょうどよく手になじむ。私は五百円という対価を支払って少しの豊かさを得たのである。これは、スーパーで夕飯の買い物をする際に少し奮発して国産の贅沢なお肉を買うのとは感覚が違う。私はこのちょっとお高いペンで文字を書き、思考を深めるのである。あくまで目的が生命維持に直結しない文化行動における少しの贅沢さは私の人間性を豊かにしてくれる。五百円のシャープペンシルは、なんだかそんな感じの気持ちにしてくれた。

12. アナログなツール

近年、考えたことや見聞きしたことを文字に起こす作業は、パソコンやスマートフォンなどデジタルな方式が主流になっている。私も特に大学に入ってから、レポートを書くときはパソコンで描くのが当たり前だし、メモを取る時もスマートフォンを使うことが多い。デジタルなツールで文字を打てば、誰がやっても読みやすい字で書けるし、訂正することも簡単だ。

しかし私はこんな時代だからこそ、紙とペンを使って字を書くことに魅力を感じることもある。

例えば、何かアイデアを出そうとする時、パソコンで直接書き出そうとするよりも、ペンを握って紙に書き出す方が、アイデアが浮かぶということがある。思いついたことを何でも自由に紙に書いていくと、ますますペンが進んで仕事はかどる。紙とペンには、そんなやる気をアップさせるような力がある気がして、使いたくなるのだ。

私は紙のアナログなスケジュール帳を使っているのだが、最近スマートフォンのアプリでスケジュール管理をしている人が多い。しかし、私は紙のスケジュール帳が好きだ。なぜなら、紙に直接書き込むことで記憶に残りやすいし、ちょっとしたメモやコメントを自由に書き込むことができるからだ。また、たくさんの種類の中からお気に入りのものを選んで買うことで愛着がわくということも理由の一つだ。

私が紙にペンで字を書くことの良さを最も感じるのは手紙だ。めったに書くものではなくなってしまったが、ラインなどのチャットとは違って、書いた人の字の個性が出て温かみを感じられる。

このように紙とペンのアナログなツールには、やる気が出たり、愛着がわいたり、温かみを感じられたりと、気持ちを動かす効果がある。デジタルの時代だからこそ紙とペンを使うことの良さがわかってきた。

13. 文房具と友達関係

さまざまなキャラクターが描かれた鉛筆や下敷き、におい付きの消しゴム。私が小学生～中学生のころまでそのような文房具が流行しており、周りの人たち（特に女の子）はほとんどそれらを少なくとも一つは所持していたのではないだろうか。

そもそも「文房具」とは何か。文房具とは、紙やペン、定規といったものを書くのに必要なものである。書くことができればそれは文房具といえる。過剰に装飾を加えなくても機能するのである。

ではなぜ私たちは小中学生のころにキャラクターが描かれた文房具や機能的とは言えない文房具を好んで使っていたのだろうか。そこには文房具の性能以外の、大事な要素が詰まっている。

ひとつは自分自身を表現するためのものとしての文房具である。四月になり、新しく小中学生になったり、クラス替えが行われたりする。そこで新たな友人関係を作るうえでのきっかけとして機能するのが文房具だ。その人が持っている文房具を見ればどのようなキャラクターが好きなのか、自分と気が合いそうな人なのかが何となく見える。そして、それをきっかけに相手に話しかけに行くことも可能になる。

もうひとつは自分とおそろいの文房具を持っている相手との友情を示すためのものとしての文房具である。ディズニーリゾートに遊びに行くと、学生らしき子供たちが文房具グッズ売り場でどのグッズを買おうか悩んでいる場面に遭遇することがある。そのグッズを見てみると、たいていはペンであったり消しゴムであったりが複数個セットで販売されている。これを購入するほとんどの子は自分と仲のいい友達に配っているだろう。もらった側からすると、それをくれた子は自分を比較的親しい友人として認識してくれているのだと安心することができる。

ただものを「書く」だけではなく、自分とはどういう人か、友人としてみているのか、そういったことを表現できる重要なパーツの一つなのだと考えると学生が文房具を集めるのにも納得がいく。

14. 文房具の立ち位置

小学校高学年頃、私はピアノ教室の帰りに文房具屋さんに寄るのが楽しみだった。ちょうど親が送迎することが少なくなり、教室と同じ建物に文房具屋さんがあったことでちょうど良い寄り道になった。母があまり文房具にこだわりがなかったため文房具屋さんには滅多に行っていなかったことも大きかったと思う。当時のお小遣いは限られていたのでほとんどウィンドウショッピングになっていたが、次お小遣いが貰えたら何を買おうか楽しみにしながら吟味していた。少々高くてもチャーム付きの鉛筆をよく買っていたことを覚えている。

中学生になるとシャーペンが許可されたことで、クルトガなど機能性があるもの、それに加えてデザインが可愛いものが気に入っていた。さらにカラーペンや付箋等様々な文房具を集めていた。私はデザインが苦手なのでノートはシンプルに書いていたが、周囲にノートをいかに綺麗にするかに力を入れている人が多かった。今思えば校則が厳しめの中、ノートは唯一自己表現が可能だったのかなと思う。

高校生の頃は中学生のときに買ったシャーペン等が長持ちしていたのと、塾などのチラシとともに蛍光ペンや消しゴムが貰えたことによりあまり文房具を買わなくなったように思う。小学生の頃はウィンドウショッピングの対象は文房具であったが、服や雑貨に変わっていた。今でも服屋さんや雑貨屋さんに行くだけでワクワクする。今はレポート作成はパソコンで書き、スケジュール管理もスマホですることが多く文房具を手にする機会が減ってしまった。もちろん今も可愛いペンや付箋は好きだが、こだわりも昔ほど強くなって文房具がアクセサリのようなものから必要に応じて購入するものになっているなど気付いた。

小学生の頃、文房具に無頓着な母を不思議だと思っていたが年齢や立場によって自分の中での文房具の立ち位置が変わったからだと納得した。

15. 文具の持ち歩き

学校に行くとき以外、例えばショッピングや友人との外食、旅行などの外出時に筆箱を常に持ち歩く人はどのくらいいるだろうか。

私は荷物を極力減らしたいので、筆箱をまるごとは持ち歩かないが、黒ボールペン一本を化粧ポーチの中に入れて持ち歩いている。スケジュール手帳は常に持ち歩いているのに、それに予定を書き込む筆記用具を持っていないのは不便だからだ。手帳のためのペンだが、それ以外でも大活躍したことがある。私がよく行くアーティストのライブの物販ではオーダーシートの用意が推奨されている。ライブのホームページからダウンロードして印刷したり当日物販開始前に配布されたりするオーダーシートに事前に欲しいグッズや合計金額を書き込んでおけばレジでスムーズに会計ができるというものだ。会場にもペンが置いてあるスペースがあるが一度物販の列に並ぶとそこには戻れない。しかし、自分で持ち歩いているペンがあれば、列に並んでいる時に急に欲しいものが変わってもオーダーシートを書き直すことができる。優柔不断な私にはポーチのペンに何度も助けられた。

今持ち歩いているのはペン一本だけだが、ハサミの持ち歩きも検討している。以前旅行に行ったとき、現地で買った衣類を夜にホテルに戻ってから身に着けようとしたときに衣類のタグピンが外せなくて困ったことがあったからだ。ハサミの代わりになるものはホテルの部屋にも自分の持ち物の中にもなく、ネットで「服 タグ ハサミがない 外し方」などで必死に検索して見つけた、ピンの先端をつまんでタグピンを軸に衣類ごと振り回して外すという力技でそのときはなんとか解決した。コンパクトな文具の中ではハサミが有名だが、筆箱でかさばらないという利点以外にも外出先で持ち歩けるという利点があるのだなと思わされた経験だった。

自分と文具の持ち歩きという観点で考えてみると、色々な種類のコンパクトな文具やペンケースつきの手帳バンドなどが売られているのは、私のような「便利だ」や「困った」と、しかしそれでもできるだけ持ち物を減らしたい思いがあるからなのだろう。

16. 機能性と独創性

私は文房具とは何かということを考えたときに真っ先に思ったことは、今の時代文房具には何が求められているのだろうという疑問である。デジタル文具などというものも出てきているらしいが、文房具とはやはりアナログなものだと私は考える。書く、切る、貼るなどという作業を実際にこの手で行うための道具であり、電子機器に疎い子供やお年寄りにまで需要があることからそのアナログな側面がうかがえる。だがこの情報化社会においてあらゆるものがデジタル化していくなかで、文房具に求められているものは利便性よりもむしろ独創性になってきているのではないかと私は考えた。

なぜあらゆるものがデジタル化していくのか。それはやはり便利だからというのが一番の理由だろう。だが文房具はデジタル化が難しいものの一つだろう。文房具の機能をデジタル化したものは既にあらゆる端末に備わっており、デジタル化してしまえばそれは文房具ではなくなってしまう。つまり機能性を突き詰めていくよりは、見た目、つまりデザイン性の方がより人々に重視されていくのではないだろうか。デジタル化がどこまで進もうが人々がアナログを手放せないのは、デジタルにはない面白さや暖かさがアナログにはあるからではないのか。アナログな文房具は機能性でデジタルに挑んでもしょうがないのである。

ノートが新しくなった時や、新しい色のペンを初めて使ったときのあの高揚感が私は大好きだ。ノートなんて、新しくなっただけでテンションが上がり勉強を頑張ろうという気になったし、筆箱を新しくした日には次の日に学校に行くのが楽しみで仕方がなかった。気持ちを動かすことができることこそが、文房具が利便性以上に持つ大きな役割ではないのかと私は考える。

『文具に関する論考と企画：奈良女子大学文具ゼミ 2020』

〔2020年度「文化社会学演習」WEB版報告書〕 <https://bungu-narajo.org/>
